

紀要

■設立50周年記念号Ⅱ

円筒上層式土器における土偶意匠の展開と実態

—認識の更新と深化に向けた素描—…………… 瀬口 眞司（1）

滋賀県における縄文時代早期後葉～前期前葉遺跡の集成

…………… 小島 孝修（20）

はじまりのモニュメント

—縄文晩期における墓配置の一事例—…………… 松室 孝樹（28）

上砥山遺跡出土木製品の年輪年代測定からみた出土遺構の数値年代

…………… 前田 仁暉・星野 安治・内田 保之（35）

大津市神領所在瀬田廃寺造営過程の検討

…………… 小松 葉子（42）

八幡山城跡出土軒平瓦についての一試論

—主に製作技法・製作痕跡から—…………… 山口 誠司（54）

滋賀県内出土の江戸時代の化粧道具

…………… 田中 咲子（63）

長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編1＞

…………… 古山明日香・福井 知樹（68）

茶の利用についての研究ノート（1）

…………… 小竹 志織（85）

文化財の保存と活用のこれまでとこれから

—調査法人滋賀県文化財保護協会の取り組みから— …… 堀 真人（91）

35

長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編 1＞

古山明日香・福井知樹

目次

1. はじめに
2. 「八雲書院」について
3. 田中礎氏について
4. 採集瓦について

— 論文要旨 —

「八雲書院」とは、浅井郡田根村大字上野（現長浜市上野町）出身の田中礎氏が収集した考古資料一式のことである。同氏は、昭和 27 年(1952)に収集した資料群を「郷土史研究に役立ててほしい」という思いから、浅井町立浅井中学校（現長浜市立浅井中学校）に寄贈した。寄贈された資料群は「八雲書院」と命名され、浅井中学校から地域資料の魅力を発信していくこととなった。平成 6 年(1994)に「八雲書院」は浅井中学校から浅井町歴史民俗資料館（現浅井歴史民俗資料館）へ移管された。

「八雲書院」の資料は、浅井中学校や郷土史研究家らによって昭和 56 年(1981)に整理がされていたが、その時点で資料の欠番が存在していた。また、その後に資料の追加などもあったため、寄贈時の目録（『八雲書院蔵品目録』）と資料内容などの不一致が生じていたことから、再整理を行うこととした。この整理は、現段階における『八雲書院蔵品目録』の作成を目的としている。

田中氏が収集した資料は、滋賀県内だけではなく、京都府、奈良県、大阪府や北海道など広範囲におよび、出土地など当時の情報をほぼ明確に示している。

収集資料のうち、本稿でも扱う瓦は、古代寺院や城郭・神社など古代から近世・近代まで幅広い時代のものが採集されている。また、地域としては地元の浅井郡のみならず、田中氏が奉職していた大津市の高穴穂神社やその周辺など幅広い地域におよぶ。

なお本稿では、収集資料の内、軒瓦・道具瓦（『八雲書院蔵品目録』のNo.81～120）を中心に整理を行い、その成果について報告する。

キーワード

飛鳥時代 白鳳時代 奈良時代 平安時代 室町時代 安土桃山時代 江戸時代 八雲書院 田中礎
軒丸瓦 軒平瓦 道具瓦

1. はじめに

「八雲書院」とは、長浜市上野町出身の田中礎氏が収集した考古資料一式のことである。「八雲書院」資料群は、滋賀県内だけではなく、京都府、奈良県、大阪府や北海道など広範囲におよび、出土地など当時の情報をほぼ明確に示している。

田中礎氏は、昭和27年(1952)3月19日に、収集した資料を「郷土史研究に役立てて欲しい」という思いから、郷土の将来を担う浅井町立浅井中学校（当時）の生徒にと、浅井中学校へと寄贈した。田中礎氏の貴重な資料を郷土史教育へと活用することから、寄贈された資料を「八雲書院」と命名し、浅井中学校から郷土資料の魅力を発信していくこととなった。その後、浅井町歴史民俗資料館（現浅井歴史民俗資料館）が設けられ、平成6年(1994)10月30日に浅井中学校の「八雲書院」資料群は全て、この資料館へと移管された。

本稿は「八雲書院」資料群について、田中礎氏や浅井中学校、郷土史研究家たちによって整理された瓦を中心に再整理を行った成果について報告する。「八雲書院」資料については、浅井中学校に寄贈された後、田中礎氏の子孫が考古資料などを追加寄贈している。そのため、浅井中学校に寄贈された際に作成された目録と収納資料の個体数が合致しないことや、資料に記載されている収集地名が当時の記録のため、遺跡名であっても現在名と異なることなどがあつた。本稿ではこのことも検討し、現段階での「八雲書院」資料群の整理を行い、目録を作成することを目標としている。

調査方法としては、①「八雲書院」の資料群全体について、瓦を古山・福井が担当し、それ以外の考古資料については辻川哲朗氏・井上智代氏が担当して整理を行った。②瓦については、軒瓦・道具瓦を中心に本稿で調査成果を報告し、③次稿でその他の瓦の調査成果を報告する（②・③が『八雲書院蔵品目録』のNo.81～120に相当する）。④次々稿でその他資料の調査成果を報告し、⑤「八雲書院」目録を新たに作成する予定である。

なお本稿は、1～3章を古山が執筆し、4章を福井が執筆した。

2. 「八雲書院」について

田中礎氏が収集した資料群「八雲書院」は、寄贈された浅井中学校の玄関横に資料室が設置され、郷土学習の実物教材として活用していた。

「八雲書院」資料群は、昭和56年(1981)3月30日に、粕淵宏昭氏を含む滋賀県立長浜農業高校歴史研究会の会員5名が調査を行い、考古資料の撮影や瓦などの採拓、田中礎氏が作成した展示カードや説明文などの書き写しを行い、同年5月30日に歴史研究会誌『故事残抄』創刊号に調査成果を特集で掲載している。この当時、すでに資料の欠番や、

展示カードはあっても資料が無いものもあつたことが報告されている（粕淵2000）。この粕淵氏らによる報告において、田中礎コレクション目録（「八雲書院」目録）が作成され、当時で1から161番まで（欠番含む）の資料が整理されている。

その後、浅井町歴史民俗資料館へと移管され、現在「八雲書院」には161点以上の資料が揃っている。

今回の調査では、粕淵氏らの作成した目録を元に資料を確認し、当時の資料検討からは判断し難かった内容などについても検討を行った。

3. 田中礎氏について（表1）

田中礎氏は、浅井郡田根村大字上野（現長浜市上野町）で明治5年(1872)7月20日に生まれた。高邁学校初等科、中等科、高等科から東京明治法律学校（現明治大学）に進学し、増島法律事務所での勤務を経たのち、帰郷した。帰郷してからは、田根村会議員や田根村農会評議員などを歴任した。30代半ばにして、滋賀県皇典講究分所神職養成部中等科に入学し、卒業後には地元上野の素戔鳴命神社の神職を務めている。

田中礎氏は、神職に就いている期間は郷土の歴史研究などに熱心に取り組み、遺跡などに点在していた瓦などの考古資料を収集して記録した。また、『東浅井郡志』の編纂委員を委嘱された。昭和初期には、滋賀郡坂本村（現大津市穴太一丁目）の高穴穂神社の神職を兼務することとなった。大津市内の寺院跡の瓦資料はこの頃に収集したものと考えられる。

昭和27年3月に田中礎氏は収集した考古資料群を浅井中学校に寄贈した。このときに考古資料群を「八雲書院」と号した。その8年後の昭和35年(1960)に田中礎氏は亡くなった。

4. 採集瓦について（表2・図1～6）

以下のa～oは『八雲書院蔵品目録』（浅井中学校1952、以下『目録』）の記載順に則るが、『目録』記載事項に訂正がある場合は随時本文中に記載する。pは採集地がわかるが、『目録』に記載がないもの、qは採集地が不明なものである。また、1～40の資料番号は新たに付番した。

瓦の部分名称については、『木村捷三郎収集瓦図録』（財団法人京都市埋蔵文化財研究所1996、以下『木村図録』）の「第Ⅲ章 収集資料の概要 1. 資料観察の基準」に準拠する。また、本章の記述は採集地ごとに記載をし、①は採集地の概要、②は採集瓦について、瓦の概要・注記、文様構成などの観察事項、類例の順に記載している。なお、色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1970）に拠った。

表 1 田中礎氏関連年表

年	できごと
明治 5 年 (1872)	高木宗助氏の次男として生まれ、田中家の養子となる。元名は嘉市。
明治12年 (1879)	1 月、高邁学校初等科入学。
明治15年 (1882)	5 月、高邁学校初等科卒業。同校中等科入学。
明治17年 (1884)	11 月、高邁学校中等科卒業。同校高等科入学。
明治18年 (1885)	1 月、高邁学校助教勤務。
	11 月、高邁学校高等科卒業。
明治22年 (1889)	2 月、東京明治法律学校の校外生として 2 年間就学。
明治25年 (1892)	3 月、名前を「礎」に改名。
	7 月、増瀧法律事務所に勤務(明治26年 4 月まで)。
明治27年 (1894)	田根青年同盟会長就任。
明治32年 (1899)	2 月、東浅井郡田根村上野区長となる。
明治37年 (1904)	2 月、日露戦争始まり、戦時幻灯をもって県内81ヶ所を遊説。
	4 月、田根村会議員当選。
明治39年 (1906)	上野の素戔鳴命神社に対し、波久奴神社(現長浜市高畑町)への合祀勧誘がされるが、田中礎氏は拒否する。
明治40年 (1907)	1 月、戦時幻灯遊説に対し、感謝状が贈られる。
明治41年 (1908)	2 月、東浅井郡田根村上野区長となる。
	3 月、田根村農会評議員に選出される。
	10 月、大津へ実業視察。
明治42年 (1909)	4 月、田根村役場新築委員となる。
	10 月、滋賀県皇典講究分所神職養成部中等科入学(12月退学)。
明治43年 (1910)	1 月、皇典講究京都分所教育部入学(3 月卒業)。 卒業後、上野の素戔鳴命神社の神職となる。
大正 2 年 (1913)	2 月、『東浅井郡志』の編纂が始まり、編纂委員を委嘱される。
大正 3 年 (1914)	9 月、田川遺跡(長浜市田川町)の発掘に取り組む。
大正15年 (1926)	4 月、大人塚古墳(長浜市木尾町)の発掘に取り組む。
この頃	高穴穂神社(現大津市穴太一丁目)の神職を兼務する。
昭和 5 年 (1930)	4 月、家督を譲る。
昭和11年 (1936)	8 月、佐野県会議員・柴田田根村長らと小堀遠州史跡保存会を発足させる。
昭和27年 (1952)	3 月、収集した考古資料を浅井町立浅井中学校に寄贈。「八雲書院」と号する。
昭和35年 (1960)	死去。

※五先賢の館(2008)を基に作成

表2 『八雲書院蔵品目録』『田中礎コレクション目録』対応表

八雲書院蔵品目録				田中礎コレクション目録				本稿
No.	品目	採集地	備考	No.	品目	採集地	備考	資料No.
81	古瓦	奈良県東大寺		欠番				
82	古瓦	奈良県正倉院		欠番				
83	古瓦	奈良県唐招提寺		欠番				
84	陶棺	唐招提寺	死体を入れた棺	欠番				
85	古瓦	京都市伏見桃山城		85	古瓦	伏見区桃山城	金泥が塗ってある	1
86	古瓦	蒲生郡安土城跡	金泥がみられる	欠番				2
87	古瓦	京都府下丹波周山密厳寺址		欠番				
88	古瓦	愛知県犬山城		欠番				
89	古瓦	中国蘇州寒山寺		欠番				
90	古瓦	奈良県橘寺		欠番				
91	古瓦	奈良県薬師寺		91	古瓦	奈良県薬師寺		
92	古瓦	彦根城		欠番				3、4
93	古瓦	長浜城趾		欠番				
94	古瓦	大津市膳所城趾		欠番				5、6
95	花筒			欠番				
96	古代の煉瓦	長浜市六荘町		96	古代の煉瓦	長浜市六庄町		
97	古瓦	栗田郡在原寺		97	古瓦	在原寺		
98	古瓦	湯田村八島救外寺趾		欠番				7
99	古瓦	京都市南禅寺		欠番				
100	古瓦	京都市嵯峨天竜寺		100	古瓦	京都市天竜寺		
101	古瓦	京都市下加茂神社旧神宮寺跡		欠番				8
102	古瓦	甲賀郡下田上村		102	古瓦	栗太郡下田上		
103	古瓦	甲賀郡信楽宮趾		103	古瓦	甲賀郡信楽宮		
104	古瓦	仰木村幸神地		104	古瓦	滋賀郡仰木村草神地		9
105	経筒	比叡山横川如法塔附近	塔などを建てる時、法華経をこの筒の中に入れて基礎に埋んだ。この中からも法華経が見つかったという。	欠番				
106	古瓦	大津市石山町寺辺国分寺		欠番				10～12
107	古瓦	大津市瀬田町三大寺		欠番				13
108	古瓦	蒲生郡総見寺		欠番				14、15
109	古瓦	大津市坂本町滋原		欠番				
110	古瓦	犬上郡高宮町		欠番				16
111	古瓦	大津市坂本町穴太城址		欠番				17
112	古瓦	大津市坂本町崇福寺		112	古瓦	大津市崇福寺		18
113	古瓦	大津市坂本町彦根堂		欠番				19
114	古瓦	大津市園城寺		114	古瓦	大津市園城寺		
115	古瓦	大津市比叡山宝幢院		115	古瓦	大津市比叡山宝幢院		
116	古瓦	大津市坂本町生源寺		欠番				
117	古瓦	大津市大津宮		117	古瓦	大津市大津宮		20～29
118	古瓦	大津市坂本城趾		欠番				
119	古瓦	大津市坂本槻井寺址		欠番				
120	古瓦	滋賀郡堅田町衣川寺		欠番				

※No. については『八雲書院蔵品目録』の番号を採用している。

『田中礎コレクション目録』の番号も『八雲書院蔵品目録』に準拠している。

※表は本稿が瓦を中心に報告をしていることから、『八雲書院蔵品目録』・『田中礎コレクション目録』の瓦に関わる部分（No. 81～No. 120）のみ抜粋している。

※表内の語句は各目録記載事項を掲載している。

※本稿では、軒瓦・道具瓦を中心に報告しているため、本稿で扱っていない項目がある。

※『八雲書院蔵品目録』は浅井中学校(1952)を、『田中礎コレクション目録』は粕渕(2000)を基に作成。

a. 85 京都市伏見桃山城 (図1-1、図5-1)

①概要

京都市伏見区に所在する城郭跡である。豊臣秀吉によって文禄5年(1596)に着工、翌慶長2年(1597)に完成した木幡山伏見城を指すのだろう。同城は慶長5年(1600)に焼失し、慶長7年(1602)頃に徳川家康によって再建、元和5年(1619)に廃城となった。

②採集瓦

1 唐草文軒平瓦である。顎下部に「桃山」と墨書されている。

下向きに巻く二重唐草と中心飾の上向きに巻く唐草の一部が残るのみである。瓦当面は摩滅しているが、唐草や外縁に金箔が微量残る。残存する瓦当面幅は4.3cm、下外縁の幅は1.0cm、内区の幅は3.3cmである。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。安土桃山時代。

伏見城跡では多く出土が見られる型式の軒平瓦である。山崎信二氏によると、瓦当下縁中央がやや尖り気味の滴水瓦で、文禄5年以前に出現し、それ以降も多く存在するといいい、年代が新しくなるにつれて唐草文が間延びするという(山崎2008)。

b. 86 蒲生郡安土城跡 (図1-2、図5-2)

①概要

近江八幡市安土町下豊浦ほかに所在する城郭跡である。天正4年(1576)に織田信長によって築城され、天正10年(1582)に本能寺の変が起こるとその余波で焼失した。

②採集瓦

2 輪宝文軒丸瓦である。瓦当裏に「昭和十三、三月/真野村/瀬津吉助氏/寄送」と墨書、「安土城」と朱書されている。

文様凸面に金箔が残る。瓦当面はやや摩滅している。瓦当裏は範詰めの際の指押えのちナデ調整がされる。丸瓦との接続部は丸瓦凹面に沿ったナデ調整がされる。残存する瓦当面幅は13.2cm、外縁の幅は1.6~1.7cm、残存する内区の幅は11.6cmである。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。安土桃山時代。

採集地は安土城跡とされていたが、浅井歴史民俗資料館の展示パネルによると、中井均氏の鑑定で伏見城跡のものと判明しているという。伏見区桃山町泰長老をはじめ、伏見城跡では各地で出土が見られる。文様凸面に金箔を貼り、凹面には朱を施すものもある(星野・三木2006)。

c. 92 彦根城 (図1-3・4、図5-3・4)

①概要

彦根市金亀町ほかに所在する城郭である。近江彦根藩35万石の藩庁として機能していた。慶長8年(1603)に天下普請の城として築城が始まり、元和8年(1622)に完成した。江戸時代を通じて井伊氏が領有した。明治維新により廃城

となった。

②採集瓦

3 十六花卉の菊丸瓦である。全体的に摩滅が著しい。瓦当裏に「彦根城(3)」と墨書された紙が貼付されている。

菊花文は花卉の先端が尖る有稜線花卉で、ややシャープな印象を受ける。全体的に摩滅が著しい。花卉が交互に重なる。外縁はない。残存する瓦当面幅は6.2cm、花卉幅は1.3~1.5cm、長さ4.4~4.5cmである。灰黄色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。安土桃山~江戸時代。

4 右三つ巴文軒丸瓦である。瓦当裏に「昭和十一年10月4日/彦根城瓦(1)」と墨書された紙が貼付されている。

珠文は復元すると12個前後と考えられる。珠文・巴文ともに肥大化が進んでいる。瓦当面には雲母粉がつく。瓦当裏は不定方向にナデ調整がされる。残存する瓦当面幅は7.3cm、外縁の幅は2.6cm、残存する内区幅は4.7cm、珠文は径1.4cmのものが0.6cm間隔で配される。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。江戸時代。

d. 94 大津市膳所城跡 (図1-5・6、図5-5・6)

①概要

大津市本丸町ほかに所在する城郭跡である。近江膳所藩7万石の藩庁として機能していた。慶長6年(1601)に天下普請の城として築かれ、戸田氏、本多氏、菅沼氏、石川氏と領主が変わるが、慶安4年(1651)に本多氏が再入府し、以降幕末まで本多氏が領した。明治3年(1870)に廃城となり、取り壊された。

②採集瓦

いずれも膳所藩主本多家の家紋である立葵文で、膳所城跡の調査で出土しているG-2類に分類できる(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2013)。

5 葵の葉脈などが簡略された形の立葵文である。瓦当裏に「膳所城古瓦/本多氏寄送」と墨書された紙が貼付されている。

瓦当面全体が残り、瓦当面には雲母粉が付着している。丸瓦との接着に3条のカキ目がされる。瓦当面径は14.4cm、外縁の幅は1.7~2.1cm、内区は10.3cmである。黄灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。江戸時代中期以降。

膳所城下町遺跡の調査で出土した軒丸瓦(835・1362)に似る(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2005)。

6 5に比べ、葉脈などの表現が精緻になっている。瓦当裏に「(膳カ)所城古瓦/全町本多氏寄送」と墨書された紙が貼付されている。

瓦当面には雲母粉が付着している。瓦当裏は不定方向のナデがされる。丸瓦との接着に3条のカキ目がされる。瓦当面径は14.5cm、外縁の幅は1.5~1.9cm、内区は11.1cmである。黄灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。江戸時代中期以降。



図1 採集瓦 1（1～11）

膳所城下町遺跡の調査で出土した軒丸瓦(1309・1363)に似る。

e. 98 湯田村八島救外寺趾（図1-7、図5-7）

①概要

『平成28年度 滋賀県遺跡地図』（滋賀県教育委員会2017、以下『遺跡地図』）から、長浜市八島町に所在する八島遺跡のことと思われる。八島遺跡は瓦が採集されており、白鳳時代の寺院跡と想定されている（八島廃寺）。また、近くには瓦窯である木尾窯遺跡が見つかった。

②採集瓦

7 単弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏に「昭和十四年/九月十四日拾収/五個ノ一」と墨書されている。

外区に二重圈文を巡らせる山田寺式の単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、蓮弁はかなり立体的な表現がされる。残存する瓦当面幅は6.8cm、外縁の幅は0.3cm、外側、内側の圈線ともに幅は0.7cm、蓮弁の幅は2.0cm、長さは3.0cm、子葉の幅は0.3cm、長さは1.0cmである。間弁は連続している。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。白鳳時代。

八島瓦窯系軒丸瓦に該当する（三辻・北村1989）。『近江の古代寺院』（小笠原・田中・西田・林1989、以下『古代寺院』）新庄馬場廃寺の項（第4図）、八島廃寺の項（図版211の5・6）や、『木村図録』第26図3、『水谷隆信収集資料図録』（滋賀県ミュージアム活性化推進委員会2019、以下『水谷図録』）117の八島廃寺出土の軒丸瓦と同系だと考えられる。

f. 101 京都市下加茂神社旧神宮寺跡（図1-8、図5-8）

①概要

京都市左京区に所在する神社で、賀茂御祖神社。社伝によると、崇神天皇7年に修造された記録があるため、それ以前の創建とされる。神宮寺は弘仁元年(810)に嵯峨天皇の勅願で造立されたと伝わる。以降、明治初頭の神仏分離によって廃寺となるまで存続した。

②採集瓦

8 十六花卉の菊丸瓦である。瓦当裏に「下加茂社」と墨書されている。

花卉がやや細く、密に配する。瓦当裏は不定方向のナデ調整がされる。瓦当面径は7.5cm、外縁の幅は1.0～1.1cm、内区の幅は5.4cm、花卉は幅が0.5～0.6cm、長さが1.9～2.0cmのものが0.2～0.3cm間隔で配される。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土はやや粗である。江戸時代か。

g. 104 仰木村幸神地（図1-9、図5-9）

①概要

大津市仰木の幸神社もしくは小椋神社内新宮神社の付近と思われる。

②採集瓦

9 文字もしくは梵字のある軒平瓦である。凸面に「仰木村新宮河原/収得昭和一一、九、十日」と墨書されている。

摩滅著しく判然としないが、円相の中に文字もしくは梵字が表されている。上界線が付く。凹面は瓦当から2.3cmほどまで面取りがされる。後方は糸切り痕が残る。凸面は摩滅が著しい。残存する瓦当面幅は4.0cm、上外縁の幅は0.5cm、下外縁の幅は1.1cm、内区幅は2.4cmである。円相は残存するもので径2.0～2.2cmである。浅黄橙色を呈し、焼成は良、胎土は良である。

h. 106 大津市石山町寺辺国分寺

（図1-10・11、図2-12、図5-10～12）

①概要

『遺跡地図』から、大津市国分一丁目ほかの所在する石山国分遺跡付近と考えられる。当遺跡は後期近江国分寺と推定されている。

②採集瓦

10 内区に唐草文、外区に珠文を配する軒丸瓦である。瓦当裏に朱書されているが判読できない。

瓦当面は摩滅している。瓦当面から0.9～1.0cmに範詰めの際の余剰粘土が残る。瓦当裏は不調整。丸瓦は欠損するが、丸瓦接続のために貼り付けられた粘土に丸瓦凹面の布目痕が残る。残存する瓦当面幅は9.1cmで、1.4～1.6cmの外縁をもつ。外区は幅1.2cmの珠文帯で、径0.5～0.6cmの珠文が1.3～2.6cmの間隔で配される。内区は幅2.8cmの唐草文帯をもつ。中房は径4.2cmで、径0.6～0.7cmの蓮子が1+6で配される。灰色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。平安時代。

石山国分遺跡などで同系（G3型式）の軒丸瓦が出土している（平井1996、小松2014）。また、『水谷図録』130に石山国分遺跡採集の同系の軒丸瓦が掲載されている。

11 均整唐草文軒平瓦である。凹面に「大正十四年三月十日/淡海国/石山村大字国分/古瓦」と朱書されている。

凹面には布目が一部残るが、丁寧なナデがされる。凸面も丁寧にナデがされる。凹面の側縁が面取りされる。残存する瓦当面幅は5.8cmで、上外縁は欠損する。残存する上外区は1.4cmで、径0.6～0.7cmの珠文が2.5～2.7cmの間隔で配される。下外区は1.9cmで、0.8cmの外縁をもつ。下外区には径0.7～0.8cmの珠文が2.0～2.2cmの間隔で配される。内区は幅2.5cmの唐草文帯をもち、巻き込む主葉と周囲に巻く支葉で単位をなし、3反転分残存する。にぶい黄色を呈し、焼成は良、胎土は精良である。奈良時代。

藤原宮6763型式に類似し、『古代寺院』膳所廃寺の項（第4図の2）に類似品が掲載されている。この瓦は、膳所廃寺から南に500～600m離れた箇所から出土していることから、この地は禾津頓宮ではないかと仮説が立てられている。

12 均整唐草文軒平瓦である。凸面に「大正十四年三月十

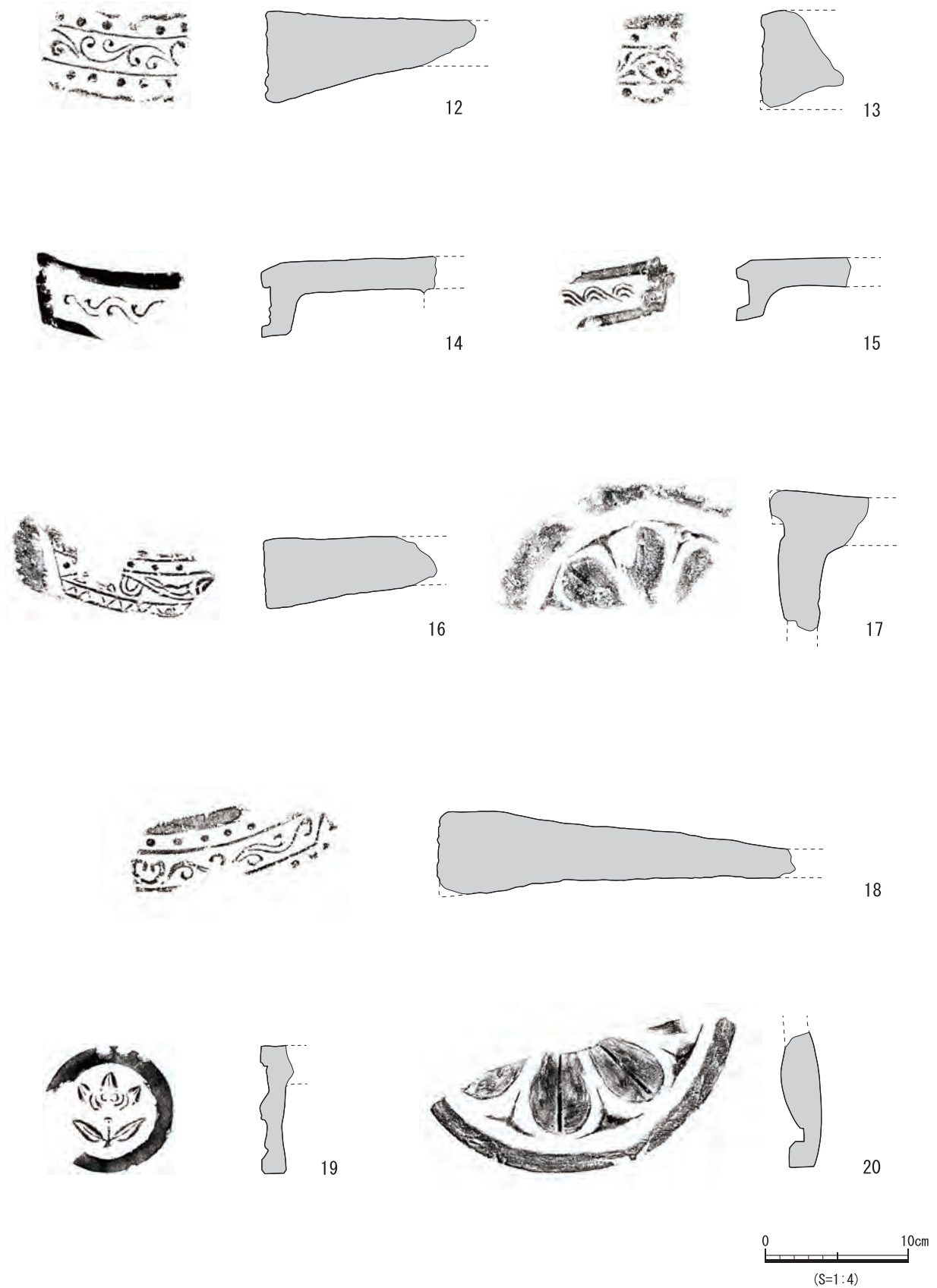


図 2 採集瓦 2 (12 ~ 20)

□日/淡海国□□/石山村大字国分」と朱書されている。

瓦当面幅は6.1cmで、0.6～0.7cmの外縁をもつ。外区には径0.7～0.8cmの珠文が0.5～1.2cmの間隔で配される。内区は幅2.2cmの唐草文帯をもち、単純な唐草2対で単位をなし、3反転分残存する。中心飾は上に巻く唐草が残る。凹面には布目が残る。黄灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。平安時代。

石山国分遺跡などでの出土が見られ、H型式と類似する(平井1996、小松2014)。そのほか、『水谷図録』石山国分遺跡採集の138、139なども挙げられる。

i. 107 大津市瀬田町三大寺 (図2-13、図5-13)

①概要

『遺跡地図』から大津市三大寺ほかに所在する近江国府跡、もしくは近江国庁跡と思われる。しかし、瓦にある「セタ大寺」という朱書から、大津市野郷原ほかにある瀬田廃寺跡の可能性も考えられる。

②採集瓦

13 均整唐草文軒平瓦である。瓦当裏破断面に「セタ大寺塔/カラクサ」と朱書されている。

残存する瓦当面幅は6.1cmで、1.0cmの外縁をもつ。外区には幅1.1～1.2cmの珠文帯に径0.7cmの珠文が2.0cmの間隔で配される。内区は幅2.4cmの唐草文帯をもつが細片のため詳細は不明である。凹面には布目痕が残る。凸面は欠損しており不明。灰色を呈し、焼成はやや不良、胎土は精良である。奈良時代。

j. 108 蒲生郡総見寺 (図2-14・15、図5-14・15)

①概要

近江八幡市安土町下豊浦に所在する寺院である。安土築城に伴い、織田信長によって創建された。二王門、三重塔などが重要文化財に指定されている。

②採集瓦

14 均整唐草文軒平瓦である。凸面に「安土城/総見寺趾旧瓦/昭和16 5 9」と墨書されている。

残存部位で唐草が4反転する。やや頭の巻き込みが甘い。瓦当面上部に深い面取りが施されている。凹面凸面ともに横方向の粗いナデ調整がされる。瓦当面には離れ砂の痕跡が残る。凹面側端には水返しが、凸面の瓦当から11.6cmに引掛けがつく。残存する瓦当面幅は4.5cmで、外縁の幅は0.7～1.2cm、文様区幅は2.6cmである。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。安土桃山時代。

15 波状文軒平瓦である。凸面に「安土城/総見寺趾拾収/昭和16 5 9」と墨書されている。

瓦当面上部に深い面取りがされる。凹面凸面ともに横方向のナデ調整がされる。残存する瓦当面幅は3.6cmで、外縁の幅は0.9cm、文様区は2.0cmである。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。安土桃山時代。

k. 110 犬上郡高宮町 (図2-16、図5-16)

①概要

現在の彦根市高宮町で、『遺跡地図』に「高宮廃寺跡？」と記される遊行塚遺跡のあたりと考えられる。

②採集瓦

16 偏行唐草文軒平瓦である。墨書等はされていないが、「太田貞子」と記された座布団とセットになっている。

残存する瓦当面幅は4.7cmで、外区上部には幅0.4cmの外縁と幅0.9cmの珠文帯が配され、径0.5cmの珠文が1.7cmの間隔で配される。外区下部には幅0.9cmの鋸歯文帯が配される。内区は幅1.9cmの唐草文帯をもち、左偏行の変形忍冬唐草文が配される。瓦当面の左側に無文部分があるが、それは桶巻作りの粘土円筒形のまま施文がされた痕跡とされる(北村1992)。凹面には布目と桶巻作りによる模骨痕が残る。凸面には縦位の縄叩き痕が残る。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

藤原宮6647型式。『古代寺院』高宮廃寺の項(第2図)に同系の軒平瓦が掲載されている。近江産6646A・B型式の文様が崩れたものが高宮廃寺のものであるという(山崎2003)。なお、6646型式は右偏行の変形忍冬唐草文である。

l. 111 大津市坂本町穴太城址 (図2-17、図5-17)

①概要

大津市穴太近郊。瓦に記される「穴太足利城」という墨書から、『近江輿地志略』(寒川1734)にいう「(天文19年)足利將軍源義晴公、(中略)坂本の常在寺に御座をかまえる。又夫より穴太の新坊へ、御座を移され(中略)穴太において薨ず」と記される「御所跡」のことだと思われる。

②採集瓦

17 素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏から丸瓦凹面にかけて「穴太足利城」と墨書されているが、瓦の年代観から穴太廃寺のものと考えられる。

八葉蓮華文である。外縁は無文。蓮弁は先端が尖る有稜線花弁で、間弁はT字型を呈する。中房は欠損しており不明。丸瓦凹面には棒状の叩き痕と思われる痕跡が残る。凸面は摩滅している。残存する瓦当面幅は9.1cm、外縁の幅は2.2～2.7cm、蓮弁の幅は3.4cm、長さは5.5cm、間弁の幅は最大で5.2cm、長さは3.3～3.5cmである。瓦当裏面に0.5cm×0.7cm前後の格子目叩きが残されている。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土は精良である。白鳳時代。

m. 112 大津市坂本町崇福寺 (図2-18、図5-18)

①概要

大津市滋賀里町甲に所在する寺院跡である。天智天皇7年(668)に、大津宮鎮護のため天智天皇によって建立されたと伝わる。鎌倉～室町時代まで法灯を保つが、『近江輿地志略』によると、江戸時代には廃寺になっているようであ

る。

②採集瓦

18 均整唐草文軒平瓦である。凹面に「大津宮/崇福寺瓦片」と朱書されている。

残存する瓦当面幅は 5.9cm である。外区上部には 1.0～1.2cm の外縁が付き、径 0.5～0.6cm の珠文が 1.6～1.7cm の間隔で配される珠文帯が配される。外区下部は径 0.5～0.6cm の珠文が 0.9～1.3cm 間隔で配される珠文帯が配される。外縁は欠損。内区は幅 1.6cm の唐草文帯をもち、巻き込む主葉と逆向きに巻く支葉で単位をなし、3 反転する。中心飾はやや頭の細い上に巻く唐草が対になっている。凹面は布目痕が残るが、瓦当から 3.5～3.8cm まで面取りがされる。凸面には瓦当に対して斜め方向の縄目叩き痕が残る。にぶい黄褐色を呈し、焼成は堅緻、胎土はやや粗である。奈良時代。

『木村図録』1229 の南滋賀廢寺採集の軒平瓦に文様構成が類似する。

n. 113 大津市坂本町彦根堂 (図 2-19、図 5-19)

①概要

大津市坂本付近であるが、「彦根堂」という建物や関する遺跡が見つからないため詳細は不明である。

②採集瓦

19 軒棧瓦である。小丸瓦当裏に「坂本彦根堂」と墨書されている。

小丸瓦当に立体的な表現の橘文を用いている。軒平部は失われているため文様は不明。瓦当面には雲母粉がつく。瓦当裏面はナデ調整がされる。瓦当裏は面取りがされる。小丸瓦当面径は 9.0cm、外縁の幅は 1.3～1.4cm、文様区は 5.9cm、軒平部の瓦当面幅は 5.3cm である。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。江戸時代後期以降。

o. 117 大津市大津宮

(図 2-20、図 3-21～29、図 5-20、図 6-21～29)

①概要

大津市錦織一丁目に所在する近江大津宮錦織遺跡、もしくは同市錦織一丁目ほかに所在する錦織遺跡と考えられる。天智天皇 6 年 (667) に遷都され、天武天皇元年 (672) の壬申の乱ののち廃された。

②採集瓦

20 素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏に「昭和十六年四月/志賀小学校ニテ/代償」と墨書されている。

八葉蓮華文である。外縁は無文。花卉は先端が丸い有稜線花卉で、間弁は T 字型を呈する。中房は欠損している。残存する瓦当面幅は 8.2cm、外縁の幅は 1.7cm、蓮弁の幅は 3.9～4.1cm、長さは最大で 5.8cm、間弁の幅は 6.2～6.5cm、長さは 2.7～3.4cm である。瓦当裏面に 0.3～0.4cm×0.3～0.5cm の格子目叩きが残されている。暗灰黄色を呈し、

焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

21 複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏に「矢野宮司採取/小金堂趾/出土」と墨書されている。

八葉蓮華文である。外縁は無文であるが、内傾面があり、そこに径 0.4～0.5cm の珠文が 1.9～2.9cm の間隔で配される。中房と蓮弁の間には圈線が配されている。蓮弁の輪郭を襷状の曲線で飾る。中房は円形ではなく、花卉状で、蓮子に対応して凹凸が設けられる。蓮子配置は 1+4。瓦当裏は不定方向のナデ調整、丸瓦凸面と瓦当面の接続には粗い縦方向のナデ調整がされる。瓦当面幅は 13.1cm、蓮弁の幅は 2.7～2.9cm、長さは 2.5～2.6cm、子葉の幅は 0.3～0.4cm、長さは 1.1～1.3cm である。中房は径 3.7cm で、蓮子は径 0.3～0.4cm のものが 1.4cm 間隔で配される。灰白色を呈し、焼成は堅緻だが、ひび割れがある。胎土は精良である。白鳳時代。

この軒丸瓦は「小金堂」とあることから、崇福寺跡で採集されたと考えられる。類例として『水谷図録』120 の軒丸瓦や『古代寺院』三井寺の項に V 型式の瓦 (図版 61 の 7) として紹介されているものがある。

22 素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏に墨書があるが判読不能である。

八葉蓮華文である。花卉は先端が尖る有稜線花卉で、間弁は T 字型を呈する。外縁はない。中房径 2.7cm で径 0.5cm の蓮子が 1 つ配置される。瓦当裏は不定方向のナデ調整、丸瓦凸面は縦位のヘラ削りがされる。残存する瓦当面幅は 9.0cm、蓮弁の幅は 3.0～3.8cm、長さは 5.5～5.8cm、間弁の幅は 2.7～2.9cm である。灰色を呈し、焼成は良、胎土は精良である。飛鳥時代。

『古代寺院』穴太廢寺の項の穴太Ⅲ型式 (図版 20 の 11、図版 21 の 12～14)、穴太遺跡の調査で出土した ANM11A 型式 (滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001) と考えられる。林博通氏はⅢ型式を穴太廢寺創建時の瓦とすれば理解がしやすいとしつつ、創建寺院および再建寺院ともに直接結びつけることは無理があると述べている (林 1989)。

23 複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏に「大津宮趾古瓦/昭和九、三、一九」と墨書されている。

八葉蓮華文である。蓮弁にはやや幅の広い子葉をもち、間弁は Y 字型を呈する。外縁は無文である。瓦当面の摩滅が著しく、中房は欠損しており不明。一本作りで造瓦されている。外縁の周囲は 0.4～0.5cm×0.8～0.9cm の格子目叩きが施される。残存する瓦当面幅は 6.1cm、外縁の幅は 1.3cm、蓮弁の幅は 4.3～4.4cm、長さは最大で 4.4cm、子葉の幅は 0.9～1.0cm、長さは 3.0～3.2cm、間弁の幅は 1.6cm、長さは 4.4cm である。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

24 素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏に紙が貼付されていたが剥落している。

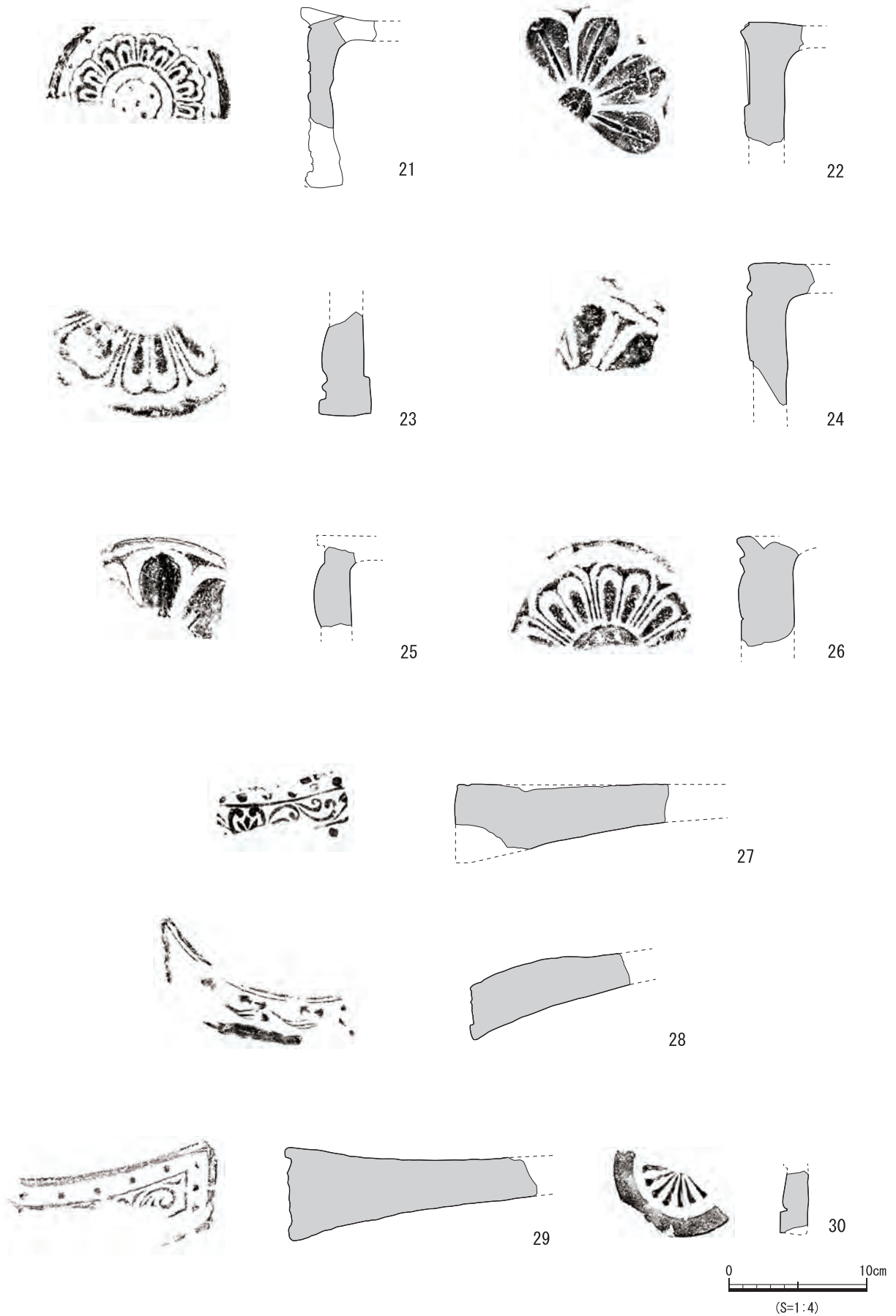


図3 採集瓦3 (21 ~ 30)

八葉蓮華文である。花卉は先端の丸い無稜線花卉で、間弁は撥状を呈する。外区と内区に間に圈線が巡る。瓦当裏は摩滅著しく、外縁、中房ともに欠損しており不明。瓦当裏に箔詰めの際の押え痕が残る。残存する瓦当面積は7.2cm、蓮弁の幅は2.6cm、長さは最大で4.7cm、間弁の幅は2.5cm、長さは4.4cmである。にぶい黄橙色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

25 素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏に「大津宮」と墨書されている。

八葉蓮華文である。花卉は先端が尖る有稜線花卉で、間弁はT字型を呈する。外縁と中房は欠損しており不明。瓦当裏は箔から外した後、ナデ調整がされる。瓦当裏は棒状工具による叩き痕と思われる痕跡と丸瓦との接続部分にナデ調整がされる。残存する瓦当面積は5.9cm、蓮弁の幅は3.3cm、長さは最大で4.6cm、間弁の幅は4.3cm、長さは2.9～3.1cmである。灰褐色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

26 複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏に「大津宮/(カンカ)ガク堂」と朱書されている。

八葉蓮華文である。外縁は無文で、花卉にはやや幅の広い子葉をもち、間弁はY字型を呈する。中房は欠損しており、蓮子配置は不明だが、径0.7～0.8cmの蓮子が1.3cm間隔で配される。全体的に摩滅が著しい。残存する瓦当面積は8.1cm、外縁の幅は0.6cm、蓮弁の幅は4.0～4.1cm、長さは4.3～4.6cm、子葉の幅は0.9～1.1cm、長さは3.1cm、間弁の幅は2.2cm、長さは4.2～4.5cmである。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

27 均整唐草文軒平瓦である。凸面に「昭和七年/十月二日/滋賀村/明光氏より/□(野カ)」と朱書されている。

中心飾はやや頭の大きい上に巻く唐草と無軸三葉文が残る。凹面には糸切り痕及び布目痕が残される。凸面には瓦当面積から11.5cmのところまでは丁寧な縦位のナデと一部横ナデがされ、そこから狭端側には縦位の縄叩き痕が残る。残存する瓦当面積は5.9cmで、上部外区には幅0.4cmの外縁と幅1.3cmの珠文帯を配し、径0.7cmの珠文が1.5～1.7cmの間隔で配される。下部外区は幅1.7cmの外縁と幅2.7cmの珠文帯を配する。内区は幅2.3cmの唐草文帯をもち、単純な唐草2対で単位をなし、2反転分残存する。黄灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。平安時代。

12と文様構成は似るが、27は文様が肉厚に表現される。

28 飛雲文軒平瓦である。凹面に「昭和十六年四月/志賀小学校ニテ/代償」と墨書されている。

左側半分のみが残存である。雲頭は立体的な表現で、尾は3本ずつのようである。上界線がつく。残存する瓦当面積は4.1cm、上外縁の幅は0.6cm、下外縁の幅は0.8～1.1cm、内区の幅は2.4cmである。凹面には乱雑なナデ、凸面には縦位の縄叩き痕が残る。灰白色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。奈良時代。

近江国府の飛雲文軒平瓦A2型式と思われる(平井1989・2011)。

29 均整唐草文軒平瓦である。墨書等はされていない。

残存する瓦当面積は6.6cmで、外区には幅0.7～0.8cmの外縁と幅1.1～1.3cmの珠文帯を配し、径0.6～0.7cmの珠文が2.0cmの間隔で配される。内区は幅2.5cmの唐草文帯をもつが欠損し、詳細は不明。凹面に布目痕が残る。側縁に面取りがされる。灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。奈良時代。

p. そのほか (図3-30、図4-31～33、図6-30～33)

①概要

『目録』に掲載されていないが、注記によって採集地がわかるものを一括して掲載する。

②採集瓦

30 軒棧瓦である。瓦当外区に「ウメ辻」と墨書されている。また、瓦当裏に朱書と見られる痕跡がある。『目録』58に「坂本村梅辻 祝部大型壺」、59に「坂本村梅辻 坏」があるため、大津市坂本付近と思われる。

小丸瓦当に十六花卉菊をもつ軒棧瓦で、軒平部は失われている。瓦当裏には雲母粉がつく。瓦当裏には棧瓦との接続のためのカキヤブリがされる。残存する瓦当面積は4.4cm、外縁の幅は1.6cm、花卉の幅は0.7～0.8cm、長さは最大で2.4cm、弁間は0.2～0.3cmである。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。江戸時代。

31 均整唐草文廻隅瓦である。凹面に「八島寺古瓦」と墨書されている。eの「湯田村八島救外寺趾」と同遺跡か不明なため、こちらに分けている。なお、『遺跡地図』によると、八島遺跡は白鳳時代、木尾窯遺跡は白鳳～平安時代・室町時代とされる。

残存する部位で連続する巻きの甘い唐草が3反転する。瓦当裏には雲母粉がつく。隅瓦同士をカキヤブリでつなぎ、凹凸両面を粗いナデ調整を行い接合する。残存する瓦当面積は4.3cm、外縁の幅は0.6～0.8cm、内区は2.9cmである。灰黄色を呈し、焼成は堅緻、胎土はやや粗である。室町時代後期。

32 十六花卉菊の菊丸瓦である。瓦当裏に「野洲郡/下新川神社/境内」と墨書されている。下新川神社は現在の守山市幸津川町に所在する。

やや細めの花卉を配する。瓦当面積は6.8cm、外縁の幅は0.8～0.9cm、内区は5.1cm、花卉の幅は0.4～0.6cm、長さは1.6～1.8cm、弁間は0.2～0.4cmである。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。江戸時代後期以降か。

33 釘隠しと考えられる。一面に「穴穂社内」と墨書されている。穴穂社は、田中礎氏が奉職していた大津市穴太一丁目に所在する高穴穂神社と考えられる。

径5.7～6.1cmの円形の中央に、1.4cm×1.5cmの四角形の穴があけられる。部分的に布目が残る。厚みは2.4～

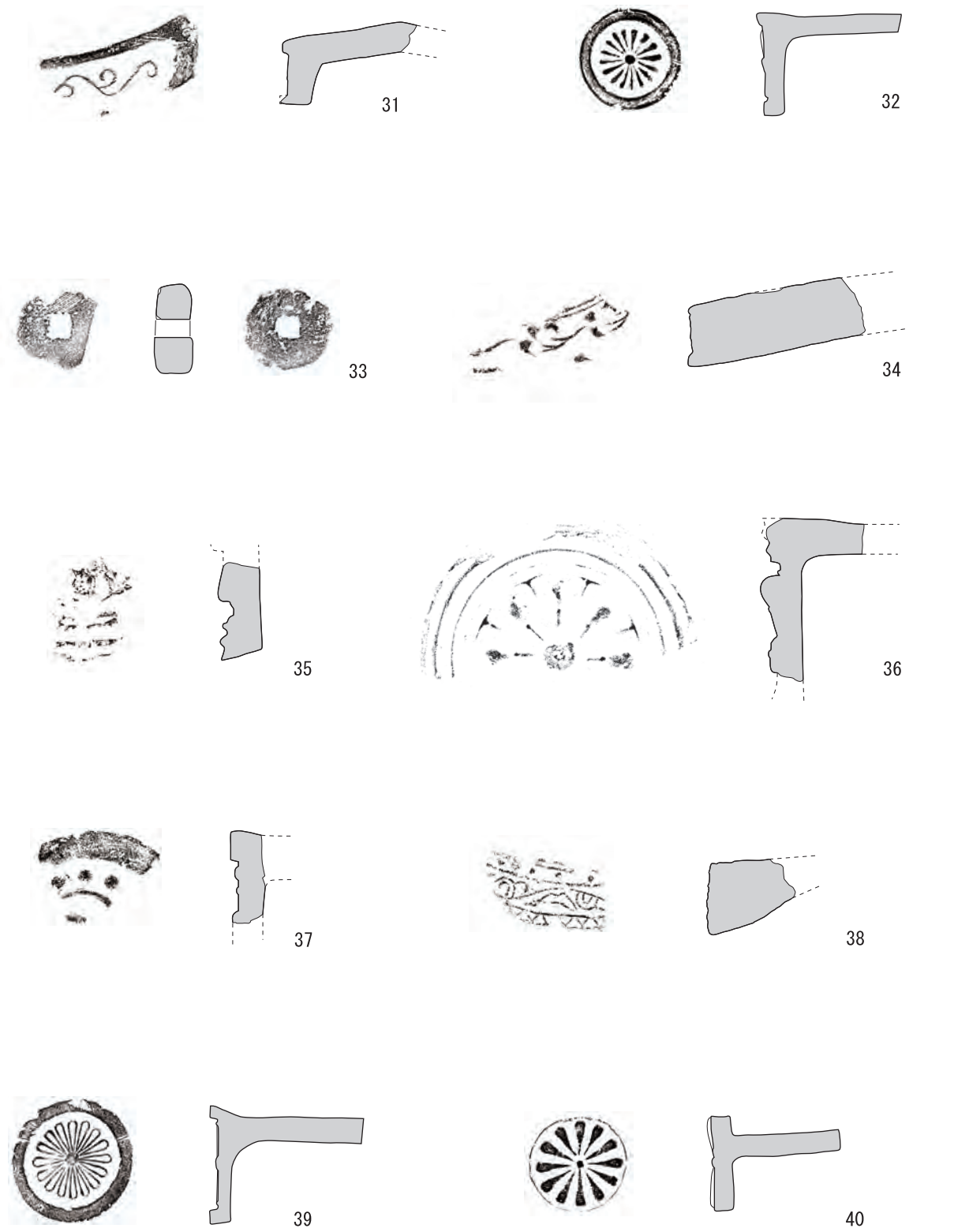


図 4 採集瓦 4 (31 ~ 40)

2.5cm。灰黄色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

伝高穴穂宮跡（高穴穂神社）に隣接する穴太遺跡の調査でも類似品(222)が出土している（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001）。

q. 採集地不明（図4-34～40、図6-34～40）

①概要

採集地に関する墨書が書かれていない、もしくは判読できないものを一括して掲載する。

②採集瓦

34 飛雲文軒平瓦である。凸面に「大正十四年/七月十四日/□□寺/□□□□趾」と朱書があるが、採集地は読み取れない。

右側半分のみで遺存である。雲頭は立体的で、尾は3本のようなものである。上界線がつく。残存する瓦当面幅は4.3cm、外縁の幅は0.4～1.0cm、内区の幅は2.6cmである。凹面は剥離や摩滅により不明。凸面はへう削りがされる。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は良である。奈良時代。

28と同様で飛雲文軒平瓦A2型式と思われる。

35 単弁蓮華文軒丸瓦である。墨書等はない。

細片のため、詳細は不明である。外区に二重圏線がめぐらされる山田寺式軒丸瓦で、内区には立体的な表現の蓮弁が配される。残存する瓦当面幅は6.5cm、外縁の幅は0.3cm、外側、内側の圏線の幅はともに0.8cm、蓮弁の幅は2.0cm、長さは2.5cm、間弁の幅は2.8cm、長さは2.5cmである。浅黄色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。白鳳時代。

2と同文で、八島瓦窯系軒丸瓦である。

36 単弁蓮華文軒丸瓦である。墨書等はない。

外区に二重圏線がめぐらされる山田寺式軒丸瓦で、内区には立体的な表現の蓮華文が配される。残存する瓦当面幅は10.6cm、外縁の幅は0.2cm、外側の圏線の幅は1.0cm、内側の圏線の幅は0.8cm、蓮弁の幅は2.3～2.5cm、長さは3.9～4.1cm、子葉は先端が丸く膨れる形状をし、幅は0.4cm、長さは1.6～1.8cm、間弁は連続する。中房は径2.4cmで、径0.8cmの蓮子がひとつ配される。灰白色を呈し、焼成は良、胎土はやや粗である。白鳳時代。

2、35と同系で八島瓦窯系軒丸瓦である。しかし、2や35のものとは細部が異なり、異範である。

37 右三の巴文軒丸瓦である。墨書等はない。

細片のため詳細は不明だが、文様の肥大化が進んでいる。瓦当裏には丸瓦との接続のためのカキヤブリが入れられる。残存する瓦当面幅は6.1cm、外縁の幅は1.8～2.2cm、珠文は径1.1～1.2cmのものが1.8～1.9cm間隔で配される。灰色を呈し、焼成は良、胎土は良である。江戸時代。

38 偏行唐草文軒平瓦である。墨書等はない。

残存する瓦当面幅は4.8cmで、外区上部には幅1.0cmの珠文帯が配され、径0.4～0.5cmの珠文が1.7～2.1cmの間

隔で配される。外区下部には幅0.8cmの鋸歯文帯が配される。内区は幅2.1cmの唐草文帯をもち、左偏行の変形忍冬唐草文が配される。凹面には布目と桶巻作りによる模骨痕、凸面には縦位の縄叩き痕が残る。浅黄色を呈し、焼成はやや不良、胎土は良である。奈良時代。

藤原宮 6647 型式で、16 と同系である。小片のため、同範関係は不明である。

39 十六花卉菊の菊丸瓦である。墨書等はない。

密に花卉を配する。弁央は凹む。瓦当面には雲母粉がつく。瓦当裏はケズリのちナデ調整がされる。瓦当面径は8.0cm、外縁の幅は0.9～1.0cm、内区の幅は6.0cm、花卉は幅0.6～0.8cm、長さ2.1cmのものが0.1～0.2cm間隔で配される。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。江戸時代後期以降か。

40 十二花卉菊の菊丸瓦である。墨書等はない。

肉厚の花卉をやや粗く配する。外縁はない。瓦当裏はナデ調整がされる。瓦当面径は6.3～6.5cm、花卉は幅が0.9～1.0cmで、長さが2.4～2.7cmのものが0.1～0.4cm間隔で配される。灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。江戸時代後期以降か。

次稿では、『八雲書院蔵品目録』についておよび、本稿で扱わなかったその他の瓦の調査成果を報告する予定である。

なお、本稿で錯誤があれば偏に筆者の浅学によるものであり、読者諸兄の忌憚ない御意見を賜りたい。

【謝辞】

資料の実見に際し、浅井歴史民俗資料館の富岡有美子氏・住知亜紀氏には多大なご厚情を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、本稿執筆に当り、太田浩司氏・小島孝修氏・辻川哲朗氏・富岡有美子氏・福井智英氏・山口誠司氏に貴重な御意見をいただきました。併せて御礼申し上げます。

文献一覧

- 浅井中学校(1952)『八雲書院蔵品目録』
浅井歴史民俗資料館(2014)『中学校に伝えられた考古遺物－八雲書院－』
飛鳥資料館(2021)『屋根を彩る草花 飛鳥の軒瓦とその文様』
小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通(1989)『近江の古代寺院』真陽社
粕渕宏昭(2000)「田中礎コレクションについて」『民俗文化』第437号 滋賀民俗学会
北村圭弘(1992)「197. 近江の古代寺院 研究の基礎資料Ⅱ」『滋賀文化財だより』No. 172 財団法人滋賀県文化財保護協会
北村圭弘(2008)「二、律令国家の形成と地方寺院－近江を舞台として－」『仏法の初め、茲より作れり－古墳から古代寺院へ－』滋賀県立安土城考古博物館
北村圭弘(2019)「近畿地方東部の一本づくり・一枚づくり」『第

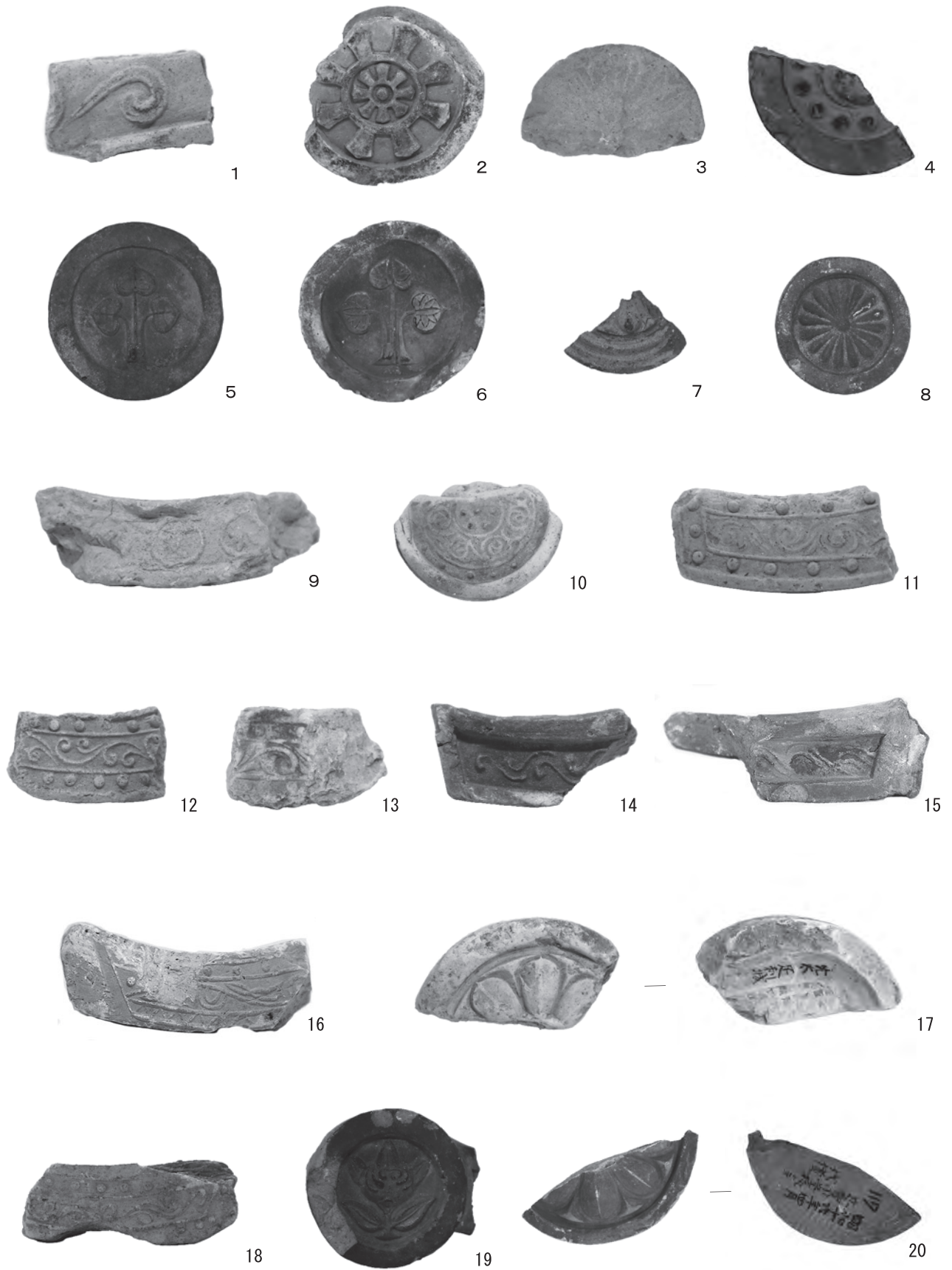


図5 写真図版1（1～20・縮尺不同）

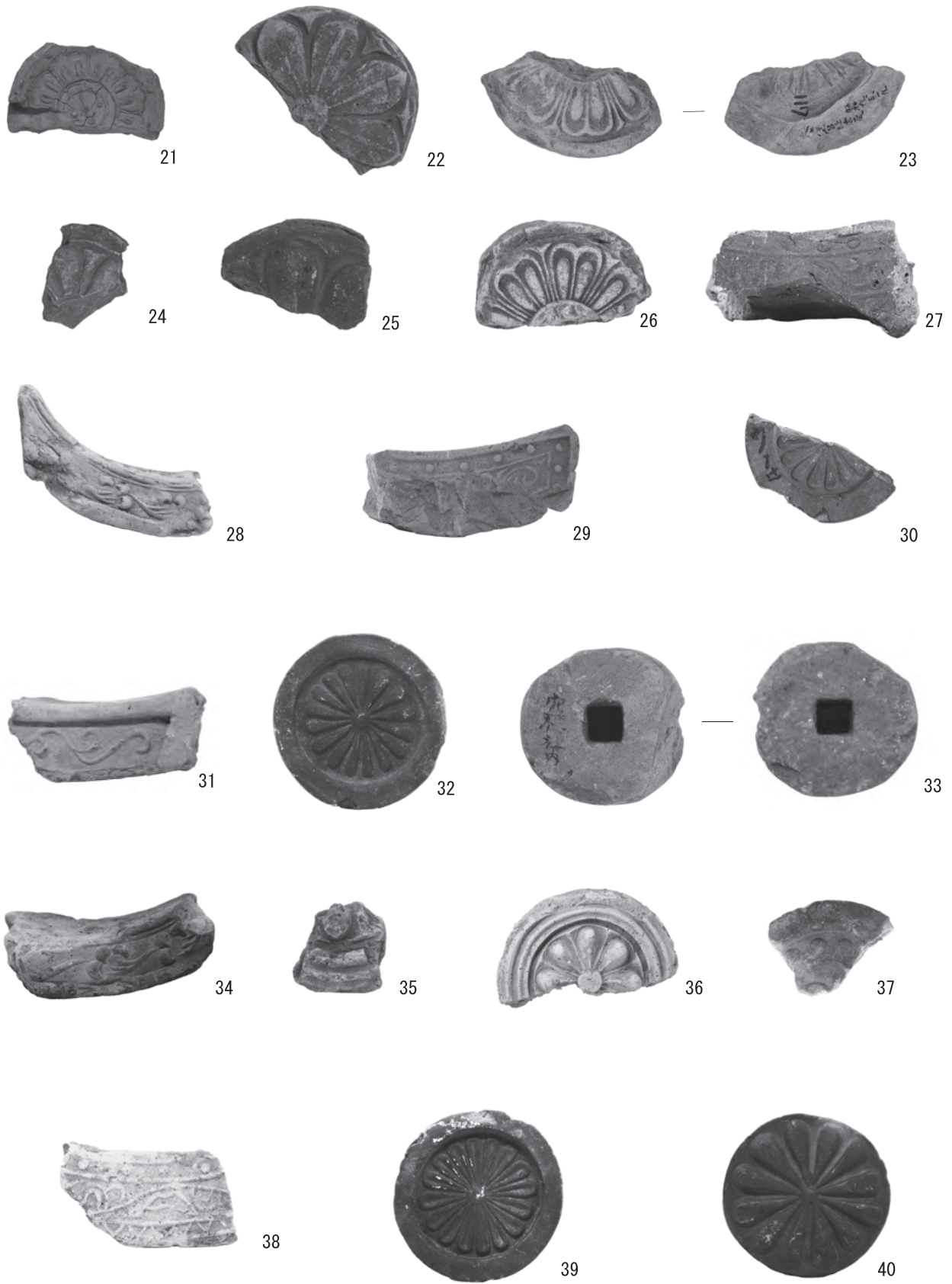


図6 写真図版2（21～40・縮尺不同）

19 回シンポジウム 8 世紀の瓦づくりⅧー一本づくり・一枚づくりの展開 2ー発表要旨』奈良文化財研究所

五先賢の館(2008)『田中礎ー「五先賢」への思いを育んだ郷土の先学ー』

小松葉子(2012)「滋賀県大津市国分所在礎石『へそ石』の周辺」『紀要』第 25 号 財団法人滋賀県文化財保護協会

小松葉子(2014)「国昌寺の創建と修造についてー大津市鳥居川霊園採集遺物の整理からー」『紀要』第 27 号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

財団法人京都市埋蔵文化財研究所(1996)『木村捷三郎収集瓦図録』寒川辰清(1734)『近江輿地志略』

滋賀県教育委員会(2017)『平成 28 年度 滋賀県遺跡地図』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2001)『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』（一般国道 161 号（西大津バイパス）建設に伴う発掘調査報告書）

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2005)『膳所城下町遺跡』（滋賀県立膳所高等学校校舎等改築工事に伴う発掘調査報告書）

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2013)『膳所城遺跡』（近江大橋有料道路建設工事（西詰交差点改良）に伴う発掘調査報告書）

滋賀県ミュージアム活性化推進委員会(2019)『水谷隆信収集資料図録』

滋賀県立安土城考古博物館(2008)『仏法の初め、茲より作れりー古墳から古代寺院へー』

滋賀県立安土城考古博物館(2018)『寺と城 近江の瓦』

滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会(2011)『大国近江の壮麗な国府』

坪井利弘(1976)『日本の瓦屋根』オーム社

仲川靖(1989)「3. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要 3』滋賀県埋蔵文化財センター

奈良国立文化財研究所(1996)『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』

林博通(1989)「2. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐってー檜木原瓦窯・穴太瓦窯関係資料ー」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要 3』滋賀県埋蔵文化財センター

平井美典(1989)「近江国序再考」『紀要』第 2 号 財団法人滋賀県文化財保護協会

平井美典(1996)「石山国分遺跡出土瓦の覚書」『紀要』第 9 号 財団法人滋賀県文化財保護協会

平井美典(2011)「飛雲文からみた近江国府の創建」『大国近江の壮麗な国府』滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会

星野猷二・三木善則(2006)『器瓦録想 其の二 伏見城』伏見城研究会

三辻利一・北村圭弘(1989)「八島瓦窯ー瓦の需給関係と工人の動向ー」『紀要』第 2 号 財団法人滋賀県文化財保護協会

山崎信二(2003)「I 部第 3 章 藤原宮造瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社

山崎信二(2008)『近世瓦の研究』同成社

挿図典拠

表 1 五先賢の館 2008 を基に福井作成

表 2 浅井中学校 1952、粕渕 2000 を基に福井作成

図 1～4 古山・福井実測

図 5・6 福井撮影

（こやま あすか：長浜市市民協働部歴史遺産課 主査）
（ふくい ともき：調査課 技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.35 2022.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages